
君の逝く場所、私の逝く場所

元宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の逝く場所、私の逝く場所

【コード】

N6280B

【作者名】

元宮

【あらすじ】

白血病患者である主人公。死にたい、いや、死にたくない・・・。

薄暗い部屋で、私は蹲った。必要なもの以外何も無いこの部屋で、私は蹲った。

この部屋からもう何日も出ていない。親が運んでくれる水と食事のお陰で私は生きている。

自分自身が分からなくなり嫌になる。自分自身がどこかで彷徨って、今の私は私じゃない。

このまま幾日も経って、どこか、遠くへ飛んで。私はいつ命を絶つんだろう。そう思った日も、遠くない。

私の病は、決して治る事を知らない。

私は、泣いていた。いつの間にか泣いていた。私はいつの間にか、病院の片隅で泣いていた。

私は病院に運ばれて、起きた時には既に涙が頬を伝っていた。私の命は、そうながくはない。

白血病と言う病名が、酷く頭に残り、私の体を蝕む菌が、鈍い痛みを感じさせる。

薬の副作用で抜けていく髪の毛。これは健康な時、凄く自慢の、長い黒い髪の毛だった。

小さな頃はセーラームーンに憧れて、その長かった髪の毛を上で二つに括ってたっけ。

中学校に入って一度、髪をバツサリとショートにした事もあった。運動部の人達がしてたように、私も同じく邪魔な髪を惜しみもせず切った。

あとで後悔したのも覚えてる。吹奏楽部に入って髪が邪魔だと思わなくなっただからだ。

髪が抜け落ちる前までは肩と腰との中間部分、或いはそれよりも上くらいの長さにまで伸びた。
白血病と分かったのは高校一年、入学したばかりで、ようやく部活にも慣れてきた所だった。
学校で倒れて、病院まで運ばれて、ようやく病に気付いた。

「いつ死んでも、いいや。」

きつと、自分の中で区切りがついていたのだろう。でなければこんな言葉は発しない。
そして無意識の内に歩いて、屋上に来ていた。

「いい天気だなあ。」

空は快晴。凄く空気が気持ち良く、急に睡魔が私を襲う。
このまま寝たら、もしかしたらもう目を覚まさないんじゃないだろうか、永遠に。
そう思うと、何故か眠れなかった。眠りたくなかった。死にたく、なかった。

「矛盾してるじゃんよ。」

自分が何故あんな言葉を発したのか分からない。
自分が何故、矛盾した言葉を発しているのが分からない。

「どうしたらいいのよ、ねえ。教えてよ。生きたいよ。苦しいよ。私、まだ、痛みを感じてる…。」

生きたい。生きたい。まだ、死にたくない。
リストカットした腕が、今更になって痛み出す。
痛い。こんなに、痛かったっけ。切った瞬間の、痛みより酷い。

「わ…たし、ひっ…まだ、死、たく…ない…ひっ…。」

気が付くと知らず知らずのうちに流れ出る涙が止まらない。

呆然と立ち尽くしたその上には、皮肉なほど晴々とした空。雲一つない、空。

一週間後、手術を受けた私は、再発が起こる可能性があるのと
りあえずまだ病院の中に居た。
すると、一通の手紙が枕もとに置いてあった。宛名は、205号室
から。

-----206号室の桜木さんへ。

手術お疲れ様でした。僕は、一週間前泣いていた桜木さんを見つ
めました。

死にたくない、と泣き叫んでいた桜木さんを見て、僕はただただ見
ているだけでした。

勝手に盗み見していた事を謝ります。しかし僕は、桜木さんから勇
気をもらいました。

僕も同じ白血病患者で、桜木さんの言葉に勇気づけられました。
短いですが、これで。

2

05号室の水川より

5

「いんにちは。」

「あ、ども。」

手紙ありがとね、とお礼を言つと少し赤くなり、読んでくれたんだ、と一言。

「私は、最初死のうと思つてたよ。いつ自分がいなくなつても、いってね。」

胸の内を語る。暫く出さなかつた、死と言つ文字。私の心に重く、鈍く、響く。

きつと、強がつていたんだろう。死を怖がっている自分を隠したかつたんじゃないか、つて。そう思う。

でも死と言つのは人生の中でもっとも怖いものなのだと、感じたんだ。

決して消えることの無いその文字。一人一人の人生につき物のその文字。

きつと今の私なら、受け入れたくない、残された時を精一杯生きてい、変だけど、多分それが私の思い。

その数日後、水川君は亡くなった。状態が悪化して、屋上で安らかに亡くなったと言う。

亡くなる直前、水川君が告げた言葉が、酷く耳に残り、胸に響く。

『 生きたい。 』

神様とは本当に皮肉な方なのだと思います。涙を流した。あの屋上で、あの椅子で、私はあの人を思い涙を流した。手紙を握り締め、折鶴を持ち、椅子に置いた。そう、亡くなる直前まで彼が腰掛けていたあの椅子に。

会わなければ良かった、そう思っではいけないのでしょうか？
手紙を読まなければ良かった、あの屋上で、泣かなければ、良かった。思っではいけないのでしょうか？

彼の逝く場所に、私も逝くんだ。君に手紙を渡す為に。

君が逝く場所で、待っていて下さい。

07・03・01

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280b/>

君の逝く場所、私の逝く場所

2010年11月5日07時31分発行